

ネイチャー高知

No16

2000年1月23日発行

中国からの野鳥輸出が禁止

【西村公志】

毎年日本では、日本に生息する野鳥と共通種の野鳥約 80 種・ 10 万羽余りが輸入され、販売されています。「鳥獣輸入証明書」のついたそれらの野鳥は、99%までが中国の北京・香港から輸入されているものです。

昨年 12 月 10 日、輸出の拠点である広東省(香港の管轄)が緊急の行政命令をだし、野鳥の輸出を禁じました。これは中国の国家林業局が全国に出した通達に従ったものです。これにより、香港からの野鳥輸出が不可能になりました。残る輸出の拠点は北京のみですが、ここの禁止も時間の問題だろうということです。

この度の中国の野鳥輸出禁止により、日本国内の野鳥販売に大きな打撃となることは必至で、2000 年早々のビックニュースになりました。下記にこの件に関して、報道された新聞記事を 2 件掲載します。

1. 野生動物を食べるのは誰だ

「野生動物の"食は広州にあり」

(「中国青年報(※1)」記者：揚 得志)

12 月 10 日、広東省林業庁は全省各地の林業部門に緊急通知をだし、全ての野生鳥類の捕獲、売買、輸出を一切禁じた。同時に、広東省関連部門も"野生動物を食べないこと"を提議(※2)し、市民に食べる悪習を改めるよう訴えて、広東省人民大会のできるだけ早い立法を目指し、碁進中である。

野生動物が大量に食べられ、乱獲、乱猟は益々猛威を振るっている。広東省林業庁によると、全省の鳥類資源は 450 種あまり。多くの種類は絶滅に瀕しているという。

全国に"食"で知られる都市といえば広州に勝るところはないだろう。広州の人々は「食べていけること」、「よく食べる」ことよりも「食べる度胸のある」ことを重視する。そこで、毎日大量の野生動物が広州で食べられている。この特殊な嗜好は、広東省の食文化に関係していると考えられている。

広州の街の料理屋を一巡すると、高級料亭から露店まで、野生動物料理を出さないところはない。なかでも「蛇類」がもっとも一般的で、どの店も店頭に大きな鉄籠を置き、いろいろな毒蛇が絡

み合ってもがいている。よその人は、飛びあがるほど驚くが、広東の食客は平気で龍の前であれこれ指差し、選り好みをする。客が気に入ったものを選ぶと、店の者は、それを取り出しその場で激しく動いているものを切っていく。

“叩き切って、すぐ煮る・., という具合である。生き血と肝は酒といっしょに、客に飲み干される。

蛇に次いで多いのが、「雀」である。この場合「雀」は「野鳥の総称」を指す。あらゆる料理店の前で、鳥たちがよく鳴く光景を目にするが、それほど鳴き続けないうちに客の前に並ぶ料理になっている。

蛇・雀は、広州のよくある「二大野生動物料理」で広州の人々には何のへんてつもない。広州の食客にとっては、ハクビシン、センザンコウなどが、真の“野生の味”と言えるのだろう。もっとひどいのは、番里県(広東省の県名)のあるレストランで、トラの肉が手に入ればその肉と毒蛇を使って、本当の“龍虎鍋”(広東省の名物料理で、猫と蛇を調理する)を出すそうだ。

専門家が指摘するには、野生生物の生息環境は太古より悪化している。汚染環境で育った野生動物を食べ続けることは、いくらも栄養を得られないばかりか、少なからず毒素を蓄積することになる。しかも広州の人々は、生食や水炊きを好む。そのため病原菌に感染しやすくなり深刻な結果にさいなまれることになる。

(本誌広州.1999年12月14日付け「中国青年報」)

※1:中国青年報=中国6大新聞の一つ、青年層に影響をもつ。

※2:「野生生物を食べてはいけない」との法規定が無かった。

2. “食の上海”に警告 野生動物が激減

[1999/12/7 日経新聞夕刊]

【上海=時事】中国の上海では年間へび1000トン、カエル50万トン、鳥類約10万羽などの野生動物が市民の胃袋に収まっており、動物資源の減少が急速に進んでいるとした報告書を上海野生動物保護協会がまとめた。野生動物を素材にした料理、薬品に根強い人気があるため、野生動物の減少は深刻な環境破壊をもたらすと警告している。

6日付の日刊紙・青年報が伝えた同報告書によると、上海とその周辺には従来370種の鳥類が生息していたが、最近の調査では159種に減少。都市化の影響もあるとみられるが、農民などが食用のため毎年多数を捕獲しており、フクロウ、キツツキなどがみられなくなった。へび、カエルにも姿を消した種類が出ており、「田園からはカエルの鳴き声が消えつつある」という。

ヒメノボタン顛末記

田城 松幸

高知新聞 8 月 30 日に"ヒメノボタンずらり"という見出しでカラー写真の記事が出たのを覚えておられると思う。ヒメノボタン騒動の責任者として事の顛末を報告しておきたい。

大方町の御坊畑(おんぼうばた)にフナバラソウがあるという情報を聞き見に行った。農道脇の法面に約 200 メートルにわたってヒメノボタンが群生している。これが満開になったらさぞかし見事であろうと思い、幡多地方に在住する土佐植物研究会の仲間 5 名と調査にいった。かつて、町内浮津の海水浴場に県内で唯一自生していたコナミキが一部の人しか知らなかった為に、しなくても良いような工事のためにほぼ絶滅した。

二度とこのような例を作らない為に幡多記者クラブに案内を送ったところ、高知、読売の両新聞社が取材に来てくれた。

現地は、県道から軽四しか入れない農道を 1km 位入ったところであり、よそから来た人が簡単に現場に行きつけるはずがないと思い、あえて地名を公表した。

さっそくその夜土地の人(二人いる地権者の一人だった)から電話があり、この地にはヒメノボタン以外にも絶滅危惧種がいっぱいあり、それらは草刈りをやめたらすべて絶滅するもの、町内を高速道路(高規格道路)が通る予定だが新聞に公表しておけば建設省もこの谷全部をつぶすような工事は出来なくなるだろうということなどを話し、概ねこちらの言い分を理解してくれたという印象を得た。

ヒメノボタン以外の絶滅危惧種も土地の人に知ってもらう必要があるので、翌日こちらから電話すると当人は留守で奥さんと話しているうちに、彼女がだんだん怒りだした。

今までも花盗人は時々いたが、新聞に発表されてから急に多くなったとのこと。要するに今まで自分たちが守り育ててきたものを勝手に新聞に出されたためバケツを持って取りに行く人まで出てきた。始めに地権者や区長等に相談してから新聞に出すべきかどうかを決めるべきではなかったかという話になった。

正直なところ、始めに区長や地権者に相談するというところまでは考えつかなかった。それは明らかに私の落ち度であり、素直にそれを認めお詫びした。

8 日の朝、高知新聞の担当記者である松木さんから電話があり、花盗人が横行しているとの情報があり、啓発の記事を書きたいからというので現地へ同行した。なんと凱旋途上の花盗人に出くわした。70 歳ぐらいの二人連れ。スーパーの一番大きなビニール袋に一杯盗っている。たいていの場合、花盗人はどこかに後ろめたい気持ちがあるはずである。がこの二人にはそんな気配は全くない。素朴というか非常識というか。一口に御坊畑といってもかなり広い。花盗人は新聞に出た花がどこにあるかを既知っている人ばかりのようである。どうやら私より松木さんの方がよけい頭に来たようで、その結果が 9 日の「ヒメノボタン乱獲」の記事であり、さらに 13 日の「土佐あちこち」へと続く。

この 9 日の記事は被害がかなり誇張されている。当然のことながら高知新聞社にはそれなりの方

針があろうし、記者にも個性がある。結果的にはこの方が良かった。翌日中村警察署の刑事から窃盗事件に相当するかもしれないので現地へ案内してくれとの電話があり、私が留守だったので妻も一人では心細く松木記者と調査に同行した男性会員1名、刑事2名の合計5人で現地へ行ったという。

刑事たちは、この花はいくらくらいで売れるのかということを楽しみに気にしていたという。後に日曜市等でヒメノボタン1株が千円で売られたとする。すると花盗人は1株千円の価値のあるものを、他人の土地から盗ってきたということになる。それを事件として扱うかどうかは警察の判断であり、その判断の基準となるのは社会通念であろう。

9月だったと思うが、かすみ網の密猟が一審で何ヶ月かの懲役刑になったのが新聞に載っていた。社会通念は時代とともに変化する。

おそらく刑事は自分たちが来たことは土地の人の噂になると言うことを承知の上で来たことだろう。さっそく御坊畑部落の区長に刑事が来たことを告げ、部落のマイクで放送してもらうように頼んだ。もしそのとおりにしてくれたなら、花盗人はたちどころに無くなるとわたしは思っている。

それから後、主に土佐植物研究会の人達を数度、十数人を現地へ案内した。一同、同様に驚くのはヒメノボタンの自生数の多さであり、イヨトンボ、ゴマクサ、メダカ等の絶滅危惧種が多く残っている豊かな自然である。それだけに地権者の今までの努力をあらためて思う。その地権者に一言も相談せずいきなり新聞に地名を出したことは、彼らにしてみればまさに寝耳に水のことであり、理屈では私の言い分を理解しても、感情では決して許してくれないだろう。地権者には大変申し訳ないことをしたと反省している。

今回の一連の騒動は、絶滅危惧種の保護のあり方に一つの方向を提起したものであり、度々新聞記事になったことでそのことを話題にするということでは十二分に効果があったと私は考える。今、自然保護の新しい一つのやり方が始まったばかりである。抵抗があるのは十分覚悟の上でやったことである。

これでヒメノボタン騒動は終わったと思っていた。ところが9月18日の広場の欄に「いつくしんで貴重な野の花」という見出しで、秘密の花園はそっとしておいて欲しかったという投書が載った。どうやらこの人は13日の「土佐あちこち」のコラムを読まなかったようである。さっそく反論の記事を書いていると妻が横から言った。「私が書く」。それが10月7日の広場欄に載った「花園は秘密にせずにみんなで守ろう」である。私の言いたいことは松木記者と妻が十二分に代弁してくれた。

9月29日に「白花の競演」の見出しでダイサギソウとヒメノボタンの白花のカラー写真の記事が出た。我が家にもこの自生地から種を取ってきたヒメノボタンの白花が咲きだして5年ぐらいになる。5年間栽培してやっと気がついた。庭という限られた空間では無限に増やし続けるわけにはいかないのである。従って当会会員で欲しい方には特別に実費でお分けしたい。種は11月、苗は4月頃。欲しい方は、0880-43-1243まで、ファックス可。

開発型から環境と共生する大手の浜・自然体験学習会

サンゴの存在的価値の変容

毎年恒例になっている「スノーケリング教室」は、夏休み中のこどもたちを対象に・・・との狙いが見事に外れ、降り続いた雨と台風の影響を受けて八月初旬から延期、三度目の九月五日にやっと開催することができた。

今年は「サンゴ教室」と、船からのサンゴウォッチングも日程に載せて、テンコ盛りのスケジュールとなった。この取り組みになったのには、少し長い訳があった。

手結港「マリナタウンプロジェクト」事業のメインであったマリーナ建設が着工から四年目の1994年、橋本知事は工事を中断していたが、その後全国的にも例の無い建設中止を決定した。運輸省はじめ関係機関との協議や手結港の位置付けに奔走した末、新たに環境と共生する港湾をめざして「エコポート」事業の指定を受ける手続きに落ち着いた。

そして数年後に事業認定を得るためには、先ず特異的なサンゴの群集を活かすための基礎データづくりのモニタリング調査の実施や、大手の浜を中心とした磯の生きものや植物の観察会、スノーケリングなどの体験型自然学習会の実績を重ねることが、至上命題に上ってきたことである。

高知県や夜須町の行政のほか各種民間団体（含、なぎさの会）などによって構成する「手結港活性化計画推進協議会」は、今年も当方で予定していた「スノーケリング教室」と「サンゴ教室」を、一体の取り組みとして主催することを決定した。

これに先立ち、大きく膨らんだ事業日程や安全上の課題、実行に係わるインストラクターやボランティアダイバー、サポーターなどの手配と確認、サンゴ水域へのブイの設置、安全監視の任務ともなる小型船の配置、浮き輪・スノーケルの三点セットの手配・テントとアンダーシート・飲料水・救急の手配・生命・障害保険の加入者名の整理と、県や町の担当者との数回にわたる打ち合せなど、短期間での準備に追われた。

最初の予定8月1日は雨天と海の濁りによって、また8日も天候不良と濁りで中止し、改めて協議の結果8月中の予定は取れず、9月5日に設定して参加者の募集を行なったがこどもの参加は19名、一般と保護者総勢で36名と暫減してしまった。さらに実行に係わるダイバーやボランティア・サポーターたちの手配が儘ならず、30名の予定が13名となり、安全面でぎりぎりの陣容となった。前日にはおもな関係者でブイの投入や浜辺の清掃を行い、泳ぎの熟練度別の組み分けや全体の配置などを打ち合せで、当日の備えを確認した。

9月5日〈目〉の日程は、次のとおり

9:00 受付〈サイクリングターミナル〉

20 開会式、連絡・注意事項、「サンゴ教室」

10:50 船からのサンゴウォッチング〈大手の浜〉

12:00 休〈昼食〉憩 この間を利用して協議会の希望者がサンゴウォッチングする

13:00 スノーケリング実習（40分を三回繰り返し、その間休憩〈20分〉二回繰り返し）

15:30 現地大手の浜で閉会式、清掃・後片付け

サイクリングターミナルでシャワー著替えて終了

サンゴ教室は、初めての講座的なものとなり、大手の浜のサンゴの種類や世界のサンゴ礁の生態、高知県とサンゴ・石灰業、地球的な位置付けなどに少し触れ、その後 12 分にまとめたスライドを鑑賞してもらった。

スノーケリングは、ほとんどの実習生がサンゴ水域に到達しており、又いくつかのグループは三ヶ所のブイをまわり、海中に広がるサンゴや熱帯魚を自分の目で楽しんでいた。

渚近くにいたこども三人にクラゲの被害があったが、他には怪我や事故もなく全体としては、ほぼ順調に推移した。しかし終盤になって沖合の上空に雲が広がり、小雨も落ちはじめて悪くなった波の状態を判断して、こどもたちの安全に注意を促しながら、約 40 分程早めに全日程を終了した。

参加者の感想は総じて、参加してよかった、サンゴがきれいだった、続けでやってほしい、参加したいなどの声があがり、今後の取り組みへの大きな力を得た思いを受けた。

12月27日(月)午後、第三回目の協議会が聞かれ、サポートした一人として私も会議に招かれた。議題、①自然体験学習会〈サンゴ野外教室〉の開催結果報告、②エコポート〈大手の浜周辺〉に向けての保全方策について、③大手の浜周辺の整備方針についての協議が行なわれた。

①の報告に先立ち現地で実行に係わったボランティアやサポーター、ダイバーなどの感想や提案、今後の取り組みなどについての発表も行なった。

欲張りすぎて体験型のスノーケリング実習が庄迫されたこと、植物や地質・磯の生きもの観察、サンゴ教室とサンゴウォッチングなど年間計画で別途日程の設定を、参加者の募集方法、ボランティアや人材養成を現地で欲しい、人材育成に自治体からの助成などの意見が提起された。

これらの提起に多くの委員から様々な声が寄せられ、緊急な課題の重要性と次期の取り組みへのステップを確認して、会議は終了した。

今回の取り組みは、「大手の浜の自然とサンゴを後世に...」を合い言葉に自分たちで考え出して、サンゴウォッチングやスノーケリング教室を通して、みんなに大手の浜を覗てもらい、実感してもらうことが重要だからと、毎年宣伝し続けてきた計画であった。

これまで運動に参加し、また静かな声援を送ってくれた方達は、行政と一体となったこの取り組みに少なからず戸惑いを見せ、事態の成り行きを見守っている。

何はともあれ大手の浜に生き続けるサンゴ群集は 10 年前も、今もその存在に何らの変化はない筈だが、ある時期は「貴重なサンゴはない」と、その存在すら否定しようとしたが、ある地元の委員さんからは、「町にとって貴重な財産として大手の浜のサンゴを護っていかなければ...」と高く評価を頂いたことに、敬意を表して終わります。

大手の浜なぎさの会

サンゴ調査代表 浜 氏 拓

「安芸ネイチャー」を設立しました

安芸ネイチャー事務局 畠山 敬介

平成11年6月11日安芸市近辺在住のネイチャーゲーム指導員9名及び、自然観察指導員4名を主体に、この組織の趣旨に賛同される一般の方19名、合計32名の会員で「安芸ネイチャー」を設立しました。同日、設立総会を開催し、会長、副会長、事務局長、書記、会計をそれぞれ1名ずつ選任しました。

事務局は、〒784-0001 安芸市矢の丸1丁目5番28号 安芸市森林組合内におき、年会費は1人1,000円で、キャンプ等のさいには費用を参加者間で割つた実費を徴収するようにしました。



「安芸ネイチャー」設立の趣旨

安芸市内原野公園を活動の拠点として、地域の一般市民並びに子供たちに自然観察会、ネイチャーゲーム体験を通じて自然とのふれあいや自然環境への理解を深める。又各指導員並びに会員相互による各種研修会や実践活動を通じて、指導技術の向上、研鑽に努める。

当地、安芸市近隣町村でも、年々貴重な自然環境が悪化し始めている現状ですが、「安芸ネイチャー」の活動の中で、自然環境保護のための一助にでも成ればと思っています。

「安芸ネイチャー」活動の状況

本年は、設立初年度でもあったせいか6ヶ月間に16件のメニューに取り組みました。延べ24日間、総動員延べ571人にも上りました。

主な活動を記しますと。

7月11日から7月12日1泊2日で活動拠点の、安芸市内原野広域公園において、周辺での自然観察会、99里山ワークショップを会員外24名の参加者で開催しました。自然観察会は当地が県立の里山公園として造成されつつありますので、レッド種のタイキギク・テイショウソウ・ノジアオイ等の植生分布のマップ作り、翌日は早朝から、アオバズクの営巣地に雛を含めた観察会を開きましたが、残念すでに巣立っていました。



9月11日から9月12日の2日間に分け、ネイチャーゲーム安芸地区「川のニューゲーム」体験会を、NG指導員主体のもと実施、会員外35名の参加者で開催しました。

10月13日から10月14日の2日間安芸市井ノ口にある「砂ヶ森自然フィールド」で井ノ口小学校4・5・6年生60名を対象に植物鑑定と植生マップ作り、及びネイチャーゲームを体験してもらいました、参加総人数73名でした。



後に聞いた話ですが、この時参加できなかった、1・2・3年生からブーイングがあり後日、日を改めてネイチャーゲームを指導することになり、12月18日に実施しました。

参加総人数80名で「私は誰でしょう」外2のネイチャーゲームを指導。

11月6日から11月7日高知県環境保全課主催の「インタープリター養成講座」に自然観察指導員2名 NG 指導員5名の計7名が「安芸ネイチャー」より参加、指導技術等の研鑽に努めた。

12月11日「森林保全ボランティア」「リハビリの森巣箱設置」を実施。安芸ネイチャー会員外参加総人数96名で、県立安芸病院の西側の雑木林の整備を図った。

以上が、主な活動の内容です。

今年は、観察会を含めた行事が目白押しで本当に忙しい日々を送ったと思います。

「あきネイチャー」設立当初からこんなにハードな活動をして良いのか、反省中ではありませんが、内原野広域公園「里山つくらんかい」の市民ボランティア活動、これは高知県安芸土木事務所主監の活動事業で「あきネイチャー」は側面から協力しており、委員会の委員にも役員4名が選任されていますそんな訳で、益々多忙な日々となってくるでしょうし、活動拠点での行事ということもあり参加しないわけにはいかず、又井ノ口小学校の様に野外教室の依頼もくることが予測されますので、余程慎重にスケジュール調整をしなければ、会員全員ぶっ倒れるんじゃないかと心配しているところです。

「あきネイチャー」で自然観察会、ネイチャーゲーム等の行事を開催する際には、「高知県自然観察指導員連絡会」事務局にも御案内を差し上げますが、是非、参加して下さい御指導をお願いしたいと思います、御協力の程、宜敷お願いします。

今大事な生き方とは・・・

字田 英一

NACS-J(日本自然保護協会)発行の「自然保護 No.443」を読んで、「まさにこれだ！この生き方こそ 21 世紀の生き方だ！」と共感した内容があった。それは宮崎県綾町の取り組んでいる行政施策のことである。この町では、「自然生態系農業」を条例化して、町をあげて、「自然の循環を断ち切らない社会を目指す」という方針で様々な工夫を凝らして、農業に取り組んでいるという内容のものであった。具体的には、各家庭に生ゴミ回収車が向かい、そのゴミは町営の堆肥工場で、牛糞と一緒に発酵させて、できた堆肥は農家が買うというしくみをとっていて、さらに人間の尿尿も町の処理場で液肥化している、というもので、生ゴミ・尿尿・家畜の糞をほぼ完全に地域内で循環しているという徹底ぶりである。そして、これといった目玉になる観光スポットもない町であったが、綾町の照葉樹林は日本本土では最大規模であるという点に目をつけ、それを一望できる歩いて渡る世界最長の大吊り橋をつくり、年間 30 万人が訪れる産業観光の町を作り上げたという内容のものであった。これによって、町民の所得が大幅にふえ、町がたいへん豊になったというわけではないということであったが、私は「これはすばらしい！」と感動した。そんなに豊かにならなくても、そこで人々が健康に生活を営んでいけるだけの目処がたち、この方法で町の財政が健全にやっていければ、これに以上贅沢を望むことはないと思う。ただでさえ、自治体存亡の危機に直面している市町村は全国に五万とあるなかで、この綾町の取り組みは立派なものである。これからの人間は慎ましく自然と共生していく道をとらなければ、いずれ近い将来に滅んでしまうことは確実である。私はこの綾町のやりかたに心から敬意を表したいと思う。

私は、この綾町のようなところに住みたいと思う。そして、手前味噌で恐縮であるが、私と同じような気持ちをもってくれる人間を育成していきたいと思う。そのためには、小学生の段階から、郷土の自然に親しみ、郷土の自然のよさを発見でき、郷土を愛する気持ちをもった子どもたちを育てていかねばと思っている。そのためには、やはり子どもたちに地域の自然と関わる体験を多く積んでもらうことが大事であると考えている。

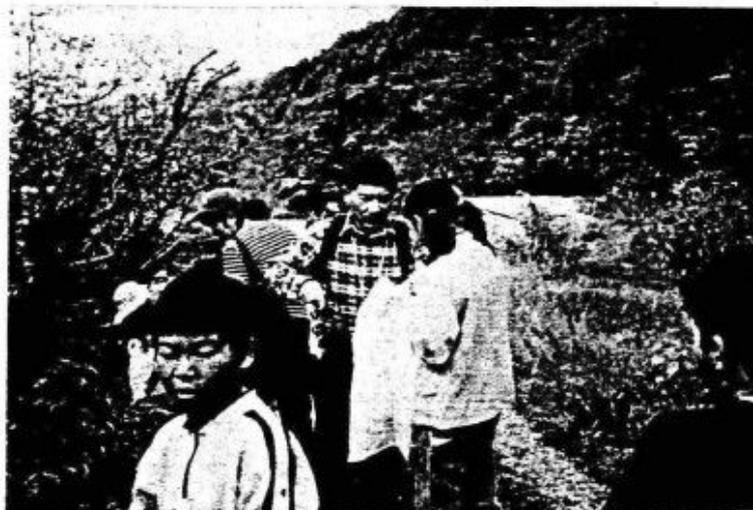
そこで、私は自分の勤務する小学校で、PTA の文化部が計画した親子植物教室に協力し、秋の植物の観察会を聞いた。場所は安芸市にある内原野公園近くの安芸川左岸一帯で、ここには、最近、住民参加の里山公園がつくられる計画が進行しているところであって、このあたりには、まだメダカもたくさん泳いでいて、昔ながらの水田や畑、雑木林があり、一昔前の日本の田舎の風景が贅沢に楽しめる雰囲気のある場所である。観察会は平成 11 年 10 月 31 日に開いた。当日は子ども 20 名大人 10 名ほどが集まり、文化部のお母さんのお世話で、車での移動もスムーズに行え、秋晴れのもと、ヤクシソウ、シロヨメナ、ダイコンソウ、ミゾソバ、アカネ、センダングサ、タカサブロウ、ノコンギク、ミゾカクシ等々・・・の花々や、カナムグラ、オナモミ、クサギ等々の果実なども観察でき、子どもたちはアラカシの実を夢中で集めたり、フユイチゴを食してその味覚に歓声を上げたりと楽しいひとときを過ごすことができた。保護者の方の念入りな準備と計画のもとに、親子ともどもたいへん熱心に意欲的に観察、採集を行うことができた。さらに、採集した植物を、そのままでは、せっかくの学習が半分の意味しかないということで、全員それを押し葉標本にして残すということで、観察・採集終了後、内原野公園の駐

車場に集まり、標本の作り方の指導も行った。これについても保護者の方が大変熱心で協力的であったので、子どもたちは全員一生懸命学習に取り組んだ。そして仕上がった標本は、いずれ学校の参観日などに展示する計画になっている。このような、植物を観察し、分類しその名前を覚えていくという地道な研究は、どちらかというところ今の日本では学問としては軽視される傾向にあるが、外国ではそうではないということ、牧野植物園長さん(小山鐵夫博士)のお話から新聞を通して伺ったことがある。私は生きとし生ける物の実体に触れる勉強が軽視されていいはずがないと思う。所詮人間も一生物である。同じ地球上に生を受けているものに興味を示さなくて、何が科学の進歩か！と言いたい。生物に興味を持つことは環境を大切にすることにつながる。採集した植物を、最後はきちんと標本にして残すという姿勢が植物に対する思いをいっそう深めることにつながると思う。

幼い子どもたちは、私が何を説明しても興味津々で、覚えるのも早く、次々と驚くような発想と鋭い観察眼で、植物の特徴を飲み込んでいくのには感激すら覚える。やはり、幼い時期の自然体験の大切さ有効さを実感した一日であった。このような体験を多く積ませ、そして自然のすばらしさ・大切さ、人間と自然との共生の大切さを小さい頃から体の中に刷り込まれた子どもたちは、大人になって、きっと環境に優しい、地球に優しい人間になってくれるものと思う。また、このような親子観察会は、子どもを介して、保護者への啓発にも役立つと思う。

また、私は一年を通じて、学校の廊下に「季節の植物展示コーナー」を設け、数日毎にその地域の違う種類の植物を解説を加えて展示している。子どもたちは結構興味関心をもって眺めてくれている。中には専用のメモ帳を用意して、それにスケッチして記録をとっている子どももいるし、友達どうしで観察し、植物に関連した会話に花を咲かせている子どももいる。このように植物に親しめる環境作りをすることによって、少しでも子どもたちが植物のことを知り、それによって自然との共生の大切さを認識してくれる人間に成長してくれたらと願っている。

高度経済成長の美名のもと、資源を食いつぶしていくことによって成り立っている今の人類の生き方はもはや限界である。地球に優しい生き方をし、綾町のように尿尿等も含めて完全に循環させ利用していくような社会の実現が今こそ急務である。



瘦狼

山本 孝信

ここからは

海がみえる

人の住むという家々もみえる

風は絶え間なく吹き

木の葉がサラサラと揺れているが

今は動くものが無い

びくびくして

人を恐れ

この山の尾根に

じっと身をひそめていると

自分にも生き抜く権利が残されているのだろうか

疑わしくなってくる

家には屋根がある

生きるためには

ときおり自分のカラに入って

フタをすることも必要ではなからうか

動かない私のそばに小鳥が来ては

首をかしげて行き過ぎる

空は青い

あの屋根の下に輝けば飯が食える

身動さできないほど

腹をすかさずこともない

だがあの白く小さく動くものは

人間に違いない

人間は恐い

本能的な恐怖が走る

私は別にとりたてて

悪いことをした覚えもないが

穢とよく似た頭を持つ

人の心を恐れる

ときおり風が止むと

目白の群がチチチと鳴きながら

私の前を過ぎてゆく

ホタンヅルの白い花には

蜜蜂が通い

せつせと飽いている

私としては

地球の一種成分子として

こんなことでいいであらうかいつも思う

それともどうでもいいことであらうか

そしてここに「つ」してあると

「人間の豊かさとは」という疑問が常によぎる

地球

それは

「豊かさ」という言葉さうな耳されないほど静謐な時空ではないのか

私は今まで

「豊かさとは豊かな自然」と

思いあがった考えで個人的に

生きてきた

たがそれのみで解決できるような

地球の問題ではなくなってきたようだ

風が吹いて

木々の小枝が揺れているうちはいい

こうして人里離れて人の営みをみていると

何か大変なものが

地球全体を覆い始めていようと思えてならない

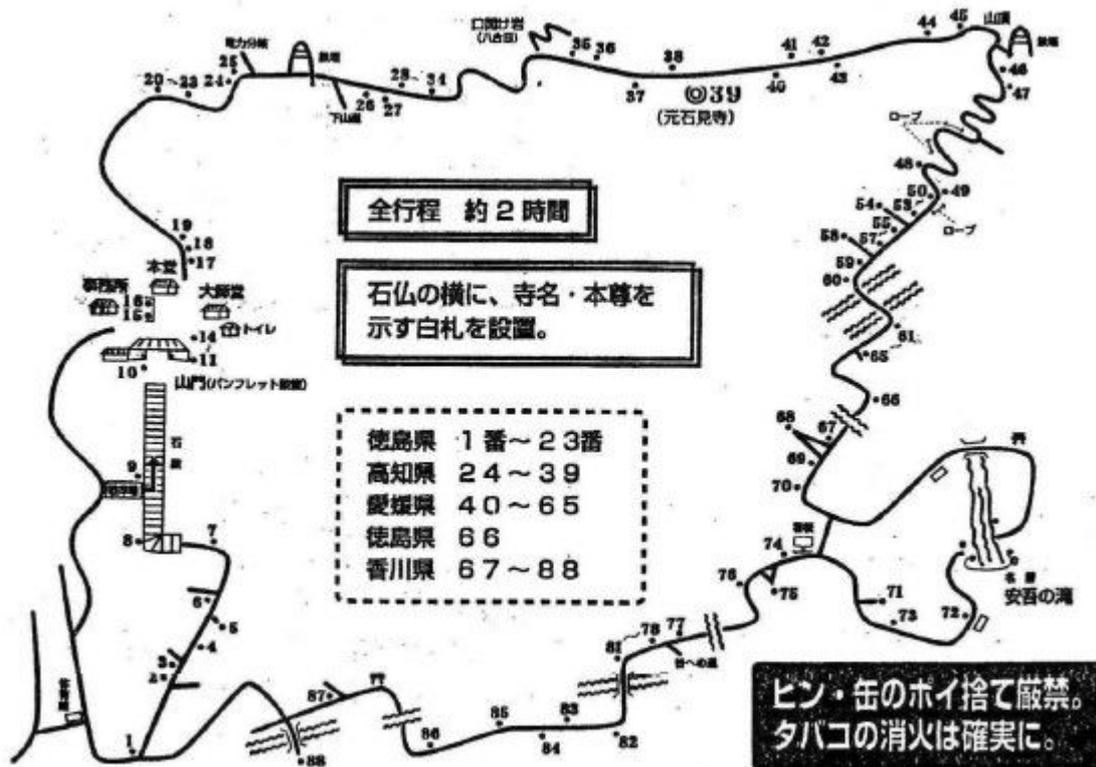
フィールド紹介 石見寺山の植物観察

澤 良 木 庄 一

石見寺山(いしみじやま)は、中村市の近郊、東北側に見える標高 410.9m の山で、山頂に 2 等 3 角点がある。山麓には古刹、石見寺(西暦 804 年、弘法大師開起)があり、昔から登山道を一巡するミニ 88 か所が開けている。石見寺山は、もともと里山の風情漂うシイカシ林の山であるが、近年スギ・ヒノキ植林の面積が増大し、やや山相が変化したかに見える。しかし、最近になってアカマツ林の消滅や、徐々にではあるが自然植生の復元などもあって、現在の石見寺山は市民の散策や、地域の自然を学習するうえで、欠かせない存在になっている。

応仁の乱を避けて中村に下向した(1467)前関白一条教房公は、中村の地に「京都を移す」という町づくりを実現させ、「石見寺は鬼門(東北の方位)の守り、叡山に等し」と位置づけ、背後の石見寺山一体は東山と称してその景観を愛でた。(五万分の一地形図 大用、二万五千分の一地形図 蕨岡、環境庁都道府県別メッシュマップ 39 高知県 88p)

石見寺山の登山道は昔から巡礼コース(別図参照)になっているが、最近では地元の東山自然愛好会や有志のボランティア活動などによって、道がよく整備されている。上り口は、中村市安並運動公園体育館駐車場近くの巡礼コース 1 番の石仏からスタートするか、9 番の石仏のある石見寺駐車場から上り始める。石見寺の山門を入ると境内は、本堂、大師堂などが古いサクラの木に囲まれていて、春は桜見物で賑わう。境内を抜けて登山道へ、途中トサミズキ、ハコネ



石見寺八十八ヶ所巡礼コース兼登山道

ウツギ、ビヨウヤナギ、ボケなどを栽植した霊園のわきを通してシイ・カシ林へはいる。すぐ道沿いの赤土の上に、コシダの葉に見え隠れしてコモウセンゴケがひっそりと張り付いている。やがてカマツカ、タイミンタチバナなどの名札が見えてくる。登山道沿いの植物名札は、現在、樹木を主として着けている。登山道は緑陰でおおわれ、夏も涼しい。つぎつぎに現れる植物たちを、名札と石仏の順番で追いながら、ゆっくり山頂を目指す。石仏45番を過ぎると山頂にでる。山頂には展望台があり、備え付けの望遠鏡で360度の展望を楽しむことができる。南方位の眼下に四万十川や、支流後川の下流水域を望み、ホエールウォッチングの太平洋を見渡す。

下りコースは山頂から東側斜面に降りながら、鉄塔の側を通過して石仏46番から下山コースにはいる。かなり急な下りで、途中ロープを伝って降りる道もあり、標高400mの山頂から200mまでの標高差を数百メートルで一気に下りる。石仏74番に立つ案内板に従って溪流に出る。ここは「安吾の滝」(やすごのたき)といい、石見寺山で最も水量の豊富なところである。付近はシイ・カシを主とした暖帯林がよく茂り、下層群落もよく発達し、シダ類やコケ類も豊富である。RDB種も分布する。この溪流全体の環境保全が望まれる。滝からの下りはゆるやかな道で、溪流沿いの登山道を踏みながら、ゆっくり植物観察が楽しめる。

登山道に沿った主な樹木は次のとおりである。

スタジイ	ネズミモチ	アカメガシワ	リョウブ
ツブラジイ	バリバリノキ	ガマズミ	オンツツジ
アラカシ	ヤブツバキ	コバノガマズミ	フジツツジ
イチイガシ	ヒサカキ	ヌルデ	ネジキ
シリフカガシ	サカキ	ハゼノキ	ハチク
ヒメユズリハ	ウラジロノキ	ヤマウルシ	モウソウチク
ヤブニッケイ	ウリハダカエデ	カキノキ	ホウライチク
イスノキ	コマユミ	カンコノキ	ヤダケ
クスノキ	カンザブロウノキ	ゴンズイ	メダケ
ヤマビワ	イヌビワ	ウツギ	マダケ
ヤマモモ	ナガバイヌビワ	マルバウツギ	スイカズラ
タイミンタチバナ	ハマクサギ	ツクバネウツギ	ツツラフジ
タブ	カラスザンショウ	ヤマザクラ	ノブドウ
カゴノキ	イヌザンショウ	ナナミノキ	ヘクソカズラ
カクレミノ	アカマツ	キブシ	ムベ
クロバイ	モミ	シャシャンボ	アケビ
コバンモチ	スギ	ヤブコウジ	サルトリイバラ

〈参考資料〉

- 1) 石見寺八十八ヶ所巡礼順路地図 (石見寺、東山自然愛好会)
- 2) 角川日本地名大辞典 (1986 角川書店)
- 3) 石見寺植物資料 (中村市商工観光課)

オオクサボタン

山崎 憲男

五台山の牧野植物園が拡張され牧野富太郎記念館が新設された。その展示コーナーに博士の伝記的な内容のテープが置かれている。それは博士が幡多地方に採取旅行に出かけたことについてである。本県出身の博士にとって、やはり県内から始められたと思われるが、それも県西部から始められたようである。それも2回ほど来られたとのこと。

昭和58年頃のことであるが、勤務先に幡多郷土資料館の館長から電話があった。「山崎君か？オオクサボタン知っちゃうか？」で始まった。「え、エ」「実は僕の知り合いから手紙があり、何でも牧野富太郎が中村に行ったとき観察会をして、その時麻生でオオクサボタンを始めて採取されたが、その場所に今も残っているか調べてくれないか。」とのことであった。さっそく為松公園にある幡多郷土資料館に行き、手紙を見せていただき二人で現地に出向いていった。

私がこのオオクサボタンの存在を知ったのは、中村市に帰ってから3年目の昭和48年であったと記憶している。11月の始めヤマノイモを探しに蕨岡の藤地区の谷間に入ったときである。入り口付近は農家が数軒あるが奥は小川を挟んで小さな田畑となり、次第に道よりも高いところに田畑がある地形になる。この段々畑の法面にオオクサボタンの群落を見たのである。この一面に今まで見たことのない植物が白髪をなびかせて群生していた。一技手に取って観てみると、図鑑で観たオキナグサの種子とよく似ている。多分美しい花が咲くのだろう。いつ頃咲くのかな、多少メルヘンティックな思いが頭をよぎる。しかし当時の私は「花より団子」である。「ヤマイモ、ヤマイモ」車に乗り込むと、めざす山芋で頭がいっぱい、その植物の姿は消え去っていた。

高校生の時生物部であった私は生物部のテーマであった黒尊の植生調査に加わった。その時の訓練ということで近くのため松公園で植物の名前や採取の仕方、群落の調査方法などを遊び半分で習い覚えた。

一般企業に就職したが、やはり植物に未練が残り、会社を辞め進学してもう一度基礎から学ぼうと気持ちを新たにしたが、「勉強」という文字が嫌いな私は、途中で再度就職することになった。だが植物とは大いに関係のある公園の管理の仕事だった。ここで安定した給料が入るようになり、以前から欲しかった植物図鑑を買うことが出来た。この本により始めてオオクサボタンの名前を知ったのである。再就職をして3年目のことである。

それから数年後、昭和58年、オオクサボタンの問い合わせがあり現場に赴いたわけである。手紙に書かれていた中村市安並麻生の谷に二人で入って確認したが、一株もない。仕方なく私が見つけていた蕨岡の藤の方に行くことにした。目的の場所に着いたが、そこにも一株もない。(ここは麻生の集落から直線距離にして1キロメートル北東に当たる位置で、一峠越せばよいところである。)あれほど群生していたのに!一株もないのである。上の田園は休耕田となり雑草

が生い茂り、法面はクズに覆われススキの葉が合間に顔を出しているという状態である。10 数年の間に農業政策のあおりを受け廃田となった。耕作することにより生き延びていた植物は姿を消してしまった。多分オオクサボタンも同じ犠牲者と思われる。

仕方なく、もう少し奥の方へ歩を進め、ほとんど耕地がなくなり山裾となった。そこで1株見つけることが出来た。何とか面目が立った。目をこらして林間を覗くと1株2株と見える。そこには5株ほどあった。もう少し奥にいくとやはり少数ではあるが数株があった。林間ではおそらくこのような状態で生えているものと思われる。しかし、あれほどの群生が見られなかったのは残念であった。平成10年に土佐植物研究会の観察会が行われ、麻生地区の国道439号線沿いの道路法面にかなりの群落が発見された。牧野博士は、ここで最初の個体を採取されたのかもしれない。

今回は多くの方のご協力を得て、たくさんの原稿が集まりました。

事務局の手抜きで、一部の方の原稿が読みにくかったことをお詫びいたします。

次号の「ネイチャー高知 N017J」の発行は、半年後の7月頃を予定しています。

次号も、たくさんの原稿をお寄せ下さるようお願いいたします。

NACS-J からのお知らせ

NACS-J 2000 年雪上観察研修会 in 山形 一雪と遊び・雪から学ぶ一

雪上の自然観察から、雪国に育まれた暮らしまでを体験し、これからの自然とのつきあい方を考えてみませんか。

■主催団体: (財)日本自然保護協会・山形県自然観察指導員連絡協議会

■日時: 2000 年 3 月 24 日(金)---26 日(日) 2泊3日

■場所: 山形県飯豊町飯豊少年自然の家

■募集対象: 一般 40 名(18 歳以上・申し込み先着順・会員/指導員を問いません)

■参加費: NACS-J 会員 20,000 円 非会員 25,000 円

■問合せ: 〒102-0525 東京都千代田区三番町 5-24 山路三番町ビル 3F

(財)日本自然保護協会普及部 担当/大野正人

TEL03-3265-0525 Fax03-3265-0527 E-mail:fukyu@nacsj.or.jp

■申し込み方法: 上記に問い合わせの上、詳細資料・申込書を取り寄せの上

山形県自然観察指導員連絡協議会へ2月28日までに申し込み

■講師: 溝口俊夫(福島県鳥獣保護センター獣医、フォレストエコライフ財団参事)

今井信五(自然観察指導員長野県連絡会会長、しろうま自然の会会長)

その他地元講師

事務局からのお知らせ

2月・3月の行事予定

春の七草観察会

2月5日は旧正月です。故事にちなんで「春の七草」の観察会を開きます。

日時 2000年2月5日(土曜日)

場所 高知市久礼野(午前9時に県立高知女子大学前に集合)

講師 細川公子さん

申込先 細川公子さん(TEL&FAX 088-845-5540)又は事務局へ

スマレ観察会

日時 2000年3月25日午後1時から

場所 JR旭駅・鏡村鏡ダム周辺(午後1時JR旭駅前に集合)

講師 細川公子さん

申込先 細川公子さん(TEL&FAX 088-845-5540)又は事務局へ

上記の二つ以外の行事については、この機関誌を出す段階では具体的な日程が決まっていないので、決まり次第お知らせします。

お知らせする方法としては、会員宛の葉書、高知新聞の「伝言板」を通じてのお知らせ、ニュースレターによるお知らせを予定しています。

最近、電子メールを利用される会員の方も増えていると思います。郵送料を節約するとともに、事務局の負担を軽くし早くお知らせするために、出来るだけ電子メールを利用したいと思います。電子メールを利用できる方は、事務局のアドレス akira@baobab.or.jp までお知らせ下さるようお願いいたします。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報No16

事務局 高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰方

TEL&FAX 088-850-0102

E-MAIL akira@baobab.or.jp